

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

No. 31 (May 2019)

日本ギaskell協会ニューズレター

初代会長、山脇百合子先生を偲んで

木村 晶子
(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)

日本ギaskell協会を創設なさった実践女子大学名誉教授、山脇百合子先生が2019年1月31日にご逝去されました。昨年10月には日本ギaskell協会30周年を祝うことができ、山脇先生もお元気だとうかがっていました。今後も協会の発展を見守っていただけることを願っていただけに、このような悲しいお知らせを受け、大変残念でなりません。

本協会は、英国ギaskell協会に出席なさった山脇先生が、日本でもギaskell研究の拠点をつくりたいと思われ、数々の協力者を得て1988年10月に創設された学会です。協会創立時は、私はまだ会員ではありませんでしたが、1990年代には入会させていただきました。今回、先生が100歳で旅立たれたとお聞きし、会長時代の若々しい先生がすでに70代、80代でいらしたことに驚くばかりです。山脇先生の柔軟な精神と鋭い知性、それでいて（失礼ながら）永遠の乙女のような独特の愛らしさを思い出すと、先生がいかに稀有の存在でいらしたかを痛感します。

山脇先生のご著書と言え、日本におけるギaskell研究の原点である『ギaskell研究』（北星堂、1976年）が有名です。ジェイン・オースティンやブロンテ姉妹に比べて邦訳作品も少なく、知名度も低かったエリザベス・ギaskellの伝記と文学的特色、主要作品の詳細な解説と研究を収録したこの書は、その後、多くの研究者が拠り所とするものとなりました。20世紀後半以降、英語圏のみならず多くの国々でギaskellが再評価され、次々と新たな視点からの研究が生まれる中、日本ギaskell協会も英国ギaskell協会との関係を深めつつ、山脇先生を中心として着実に発展してきました。長年にわたるそのご功績の大きさは今更言うまでもないでしょう。

とはいえ、『ギaskell研究』のあとがきによれば、先生が生涯の研究主題にする予定だったのはギaskellではなく、形而上詩人として有名なジョン・ダンでした。（事実、先生は、1994年に『形而上詩人ジョン・ダン——ルネッサンスに生きた現代人』を出版なさっています）山脇先生が、ギaskellをはじめとする女性作家研究を始められたのは、実践女子大学に「英国女流作家論」という講座が設けられたため、当初は戸惑われたそうです。

しかし、「彼女たちの一人一人が完全に私の心を把握してしまった。彼女たちは、文学の真髄について私に語りかけ、人生のあり方について私に大きな指針をあたえることになった」（『ギaskell研究』あとがき）とあるように、その後の先生の英国女性作家研究はめざましいものでした。アフラ・ベーンに始まって、オースティン、ブロンテ姉妹、ギaskell、ジョージ・エリオット、キャサリン・マンズフィールド、アイヴイ・コンプトン＝バーネット、ヴァージニア・ウルフまでをカバーし、その成果を『英国女流作家論』（北星堂、1978年）にまとめられました。1970年代と言え、まだ日本ではフェミニズム批評がさかんになる前だったことを思うと、ギaskellのみならず、英国女性作家研究のパイオニアとしての先生のご業績の大きさに改めて感銘を受けます。

深い感謝と尊敬の念と共に、心からご冥福をお祈りいたします。

今秋発刊の『ギaskell論集』第29号では、山脇百合子先生追悼特集として、歴代の会長をはじめとする方々の追悼文などを掲載予定です。

過去はどのように現在を侵犯するか

鈴江 璋子

(実践女子大学名誉教授)

『充たされざる者』* はカズオ・イングロの小説のなかで最も難解な作品の一つである。叙述が難解なわけでも、プロットが複雑なわけでもない。〈わたし〉つまり現在世界最高のピアニストと評価されている英国人ライダー (Ryder) が、演奏会のために中欧の小さな町を訪れ、三日を過ごして、次の予定地ヘルシンキに向けて出発しようとしている、という状況が物語られるだけなのだ。だが読者がいら立つことに、叙述は渉らない。ストーリーの進行に不要な人物が次々に登場してそれぞれ自分の話をし、写真撮影やスピーチなどの小さな要求をする。〈わたし〉は丁寧にそれに応じるので、そのたびにストーリーラインが折れ曲がるのだ。ライダーはピアノ演奏のためにこの町に来たのだから、練習をして良い演奏をしたい。読者も彼の名演奏ぶりを読みたい。だが町は、現在陥っている危機的状況を彼に救ってもらいたい、そのために彼にはイベントでスピーチをしてほしいと期待するだけなのだ。彼は予想していなかったさまざまな雑用を要求されるうえに、それに取り掛かるたびに予想外のものが出現するので、ストーリーは本来のゴールからどんどん遠ざかっていく。出現するものとは、〈過去〉である。

ライダーは初めてのホテルに泊まったのだが、通された部屋は、幼い頃「自分が寝室として使っていた部屋」(16)である。イングランドとウェールズの境あたりにあるその家で、彼は床に敷かれたラグのほつれに耳を当てて、階下で両親が烈しく言い争うのを聞いたのだった。ストーリータイムは〈現在〉なのに、〈過去〉が突然出現して〈現在〉を侵犯する。ホテルのポーターは自分の娘と孫の悩みを解決してやってほしいと頼む。わたしが会ってみると、その四十歳ほどのきれいな女性ゾフィーはわたしの妻であり、十歳くらいの少年ボリスはわたしの息子であるらしい。

両親の軋轢は記憶にある過去だが、妻子の存在は記憶にない。だが〈記憶にない過去〉は、〈現在〉のストーリーの中心に居座る。ゾフィーとボリスはわたしを夫・父親として扱い、最近引越した新しいアパートに招く。ボリスは忘れ物を取って来たいと、以前のアパートにわたしを連れて行く。だがそれはわたしが九歳の頃、両親と数か月暮らした「マンチェスターの家」(214)なのだ。ライダーは息子に、おまえは三人で落ち着いて暮らしたいと思っているのだろう、「どうしてわたしはいつも家を留守にしなければならないのか、お母さんはそれに腹を立てているのに、と。でも分かかってほしいんだよ」(217-18)と、自分の使命について語り、旅は自分にも、全世界の人にも大変重要なもので、一旦見逃すと取り返しがつかないことになるかと真剣に釈明する。ボリスはライダーの言葉を聞かずにゲームに熱中する。ゾフィーは午後中ずっと料理を作っていて、おいしいご馳走が出来上がっている、だが、美術ギャラリーのレセプションに夫婦で招かれているようだという。アパートに帰ってから、ライダーは横柄で、ゾフィーが作ったパイを食べる間も新聞から目を離さない。また「オムレツのたぐいも、ジャガイモのチーズ詰めも、フィッシュボールも作っていなかったし、ピーマンの肉詰めもなかった」(288)と、妻へのいたわりを全く示さない。

演奏会当日はスケジュールが狂って、彼がステージに進み出たのは真夜中過ぎ、もう聴衆は残っていなかった。演奏会はライダーなしで終わったのだ。彼は演奏を聞きに来た両親を探すが、両親は来ていなかった。一方、ゾフィーの父が急死するが、ライダーは傍にいなかった。早朝、彼は市内循環電車に乗る。空港に行くためだ。同じ電車に乗っているボリスは「いやだ、いやだ。ぼくたち一緒にいなくちゃ」と言うが、ゾフィーは彼が本当の父親らしく息子を愛さない、「今だってあなたは、あたしたちの悲しみの外にいるじゃない。放っておいて。消えてちょうだい」(532)と突き放す。わたしはすすり泣く。やがて親切な乗客に慰められたわたしは、電車後部のビュッフェでカップにコーヒーをなみなみと注ぎ、もう片方の手においしそうな料理をたっぷり載せた皿を持って「自分の座席へ戻ろうと歩きだした」(535)ところで小説は終わる。

一人称単数の語る物語では、客観的事実と語り手の心情との間の境界が常にあいまいであるが、イングロ自身が the grammar of dreams**を用いたと語る、過去と現在、現実と非現実がジグソーパズルのように入り乱れるストーリーテリングのなかで、男児と父親の間の信頼は奇妙なまでに揺るがない。

このような不条理はギャスケルのリアリズムロマンスには存在しない、と言いたいのだが、Ruth を見よう。アクションとして、〈過去〉は〈現在〉を侵犯する。信仰深く、美しく、非の打ちどころがない〈デンビー未亡人〉が、住み込み家庭教師として身を立て始めた矢先、〈過去〉がダン氏として出現し、〈現在〉を脅かす。ダン家を継いだベリンガムは、若い頃に誘惑して捨てた愛らしいお針子ルースのことは忘れていた。まして彼女が自分の子を産んでいるなどとは考えたこともなかった。下院議員候補者としてこの選挙区にやって来たベリンガムは、突然〈過去〉に直面する。ルースの〈現在〉は〈過去〉に侵犯される。ベリンガムが示唆する〈ダン氏とデンビー未亡人の結婚〉は〈きれいな現在〉で〈汚れた過去〉を覆い隠す絶好のチャ

ンスである。だがルースには、恋し、傷つき、苦しんだ<過去>こそが、永遠の<現在>なのだ。彼女は厚顔なくダン氏>が一瞬、青年ベリンガム——本気で彼女を愛し、髪を睡蓮の花で飾ってくれた、自分が心から愛したベリンガム——に戻ったのを、<過去>が<現在>に勝ったのを、見届けて死ぬ。彼女に<過去>を消すことはできない。最愛の息子レナードにベリンガムの面影があるのだ。

引用文献

* Ishiguro, Kazuo. *The Unconsoled*. London: Faber and Faber, 1995. 本書からの引用は括弧内に数字のみ記す。

** Ishiguro, Kazuo. 'The Art of Fiction' 196, interviewed by Sussannah Hunnewell. *Paris Review* issue 184, Spring 2008.

◆◆◆新刊紹介 (2017年度)◆◆◆ (掲載情報は2019年3月15日までに報告されたものです。)

桐山恵子編訳『英国詩でダンス——ページのなかのバレリーナ』(小学館スクウェア)

中田元子著『乳母の文化史——一九世紀イギリス社会に関する一考察』(人文書院)

日本ギヤスケル協会監修『創立30周年記念 比較で照らすギヤスケル文学』(大阪教育図書)

松岡光治編著『ディケンズとギッシング——底流をなすものと似て非なるもの』(大阪教育図書)

* 新刊書の情報を事務局 (mkimura@gifu-cn.ac.jp) までお寄せ下さい。締切は2020年3月15日です。

第30回例会レポート

日 時：2018年6月2日(土) 午後2時から

会 場：岡山国際交流センター

開会の辞：日本ギヤスケル協会会長

木村 晶子(早稲田大学教授)

研究発表：司会 松岡 光治(名古屋大学教授)

1. 『『ルース』における女性労働者の表象をめぐって——「堕ちた女」と「善良な女」——」
西村 美保(名古屋学院大学教授)

2. 「アン・サッカレー・リッチーとギヤスケル」

矢次 綾(松山大学教授)

講 演：司会 大野 龍浩(熊本大学教授)

「North and South——Shirleyの再構築」

白井 義昭(横浜市立大学名誉教授)

閉会の辞：日本ギヤスケル協会副会長

松岡 光治(名古屋大学教授)



(撮影：大野龍浩)

研究発表

1. 「『ルース』における女性労働者の表象をめぐって——「墮ちた女」と「善良な女」——」

本発表では、ギャスケルの『ルース』(Ruth 1851)を取り上げ、ベンスン家の使用人、サリーに焦点を置き、その表象とプロット上の重要性を吟味した。まずは当時の女性労働者の性的搾取をめぐる文化的コンテクストを探求して、性的墮落の主な要因について説明した。特にお針子と女性使用人は低賃金故に道を踏み外しやすく、「墮ちた女」という言葉との連想もされやすい。慎ましい身分の女性使用人の場合、ヴィクトリア朝小説において、「問題ある使用人」として描かれることも多いが、『デイヴィッド・コパフィールド』のペゴティ同様、かつて子守りの時代があったサリーは、労働環境に恵まれた上、セクシュアリティと経済の両面でマネジメント力を与えられている。健全な判断力と倫理観を備え、勤勉で主人に忠実なサリーは、まさに「善良な女」の権化である。一方で彼女の粗雑さや、頑強なイメージなどがルースの美しさを一層際立てる効果を持っている。サリーは「墮ちた女」の地位の低さを示すだけでなく、情報提供者としての役割、さらには、ルースの生きざまと世間の冷たい仕打ちについての証言者としての役割も与えられている。

(西村美保)

2. 「アン・サッカレー・リッチーとギャスケル」

アン・サッカレー・リッチーはウィリアム・サッカレーの娘で、19世紀後半、特に1860年代および1870年代は人気作家だったが、20世紀になると、その作品はほとんど読まれなくなってしまった。この発表では、最初に、サッカレーの娘として受けた恩恵と、娘として果たさなければならなかった責任に注意を払いながら、彼女の人生と著作物を概観した。その際に、彼女が同時代の文人からどのように評価されているかについても留意した。続いて、彼女がサッカレーの娘であるという意識の他に、自分は有名無名の女性たちが紡いできた文学の伝統の継承者であるという意識もまた持っていたことを立証した。その上で、彼女が敬愛している女性作家たちについて、どのような考えを持っていたのかを、ギャスケルを中心に吟味した。ギャスケルの他に言及したのは、オースティン、シャーロット・ブロンテ、オリファント、エリオットである。リッチーはギャスケルのことを、オリファントと共に自分の“torch-bearer”と呼んでいるが、その手法に倣っている可能性が高いのはギャスケルだと、著作物から推測した。(矢次綾)

講演：「North and South—Shirleyの再構築」

概要は、Elizabeth Gaskellの*North and South* (以下NSと略)とCharlotte Brontëの*Shirley*に認められる、対称的なプロット展開や類似した固有名詞の使用など作品全体にわたる多くの対応関係を、両テキストの綿密な読み込みと縦横無尽の連想によって、明らかにするもの。

たとえば、(a) *Shirley*における3人の助祭、Robert MooreとCaroline Helstone、Louis MooreとShirley Keeldar、そして再び3人の助祭へと焦点が移動するsymmetricalなプロットが、NSでは、Edithの結婚で始まりMargaretの結婚で収束する、より整理されたsymmetricalなプロットに発展していること、(b) *Shirley*中の人物名HelstoneがNS中の地名Hestonに反映されていることなど。

圧巻は、父権制擁護の詩人John Miltonの名を冠したMiltonは、工場主John Thorntonが体現する男性中心の社会だったが、Margaretが労働者の攻撃から彼を守った時点から、彼に芽生えた恋愛感情、父や名付け親の死などを通して、Margaretの力が増していく女性中心社会へと変化していくという指摘。*Shirley*では工場主RobertをCarolineもShirleyも労働者の打ち壊しから守れず、二人は結局男性社会に同化して行き、父権制を擁護することになった。

これまでわたしは作品構造を客観的に分析した結果を土台にして作品の主題を明らかにすることを試みてきたが、テキストを深く読み込まれた白井先生の作品解釈から、あらためて、真理を追究するためにはdistant readingとclose readingの相互補完が不可欠という思いを新たにさせられた。(大野龍浩)

「例会に参加して」

第30回日本ギャスケル協会例会は、岡山国際交流センターにて開催された。今年度より日本ギャスケル協会会長に就任された木村晶子氏の開会の辞で幕が開いた。

まずは2名の研究発表が松岡光治氏の司会で行われた。1人目は西村美保氏で、当時の女性労働者の性的に墮落しやすい環境を詳細に述べられ、そうした状況にもかかわらず、善良な女として墮落することのなかったサリーの姿を、ペゴティと比較しつつ、浮き彫りにされた。また、サリーがルースの髪を切る場面と、ルースの死後のサリーとベリンガムとの対面の場面に着目された。個人的には髪を切る場面への着目が興味深く、これまでブロンテを中心に研究してきた自分は、ブロックルハーストが生徒の髪を切ろうとする場面がパッと思い浮かんだ。2人目は矢次綾氏で、発表の始めに「アン・サッカレー・リッチーとギャスケル」という内容であると述べられていたように、アニー(氏が発表でこのように呼ばれており、フロアの方もアニーと呼ばれていたのが大変微笑ましい記憶として残っている)に関して、かなり詳細にお話下さり、大変勉強になった。また、ギャスケルに関してはストーリーテラーとしての才能やその描写力をアニーが大変評価していた点を指摘され、さらにオースティンをいち早く評価した人物としてアニーを評価された。

休憩をはさみ、大野龍浩氏の司会のもと、白井義昭氏のご講演が行われた。氏は、シャーロット・ブロンテの『シャーリー』のプロット上の欠点を指摘され、ギャスケルが『北と南』において『シャーリー』の欠点を克服し、再構築していった様子を詳細に述べられた。両作品の名前の対応性や、2人の女性が父権制に収まってしまう『シャーリー』に対し、父権制中心だった世界がマーガレット中心の女性がリードする世界へと

変化していくのが『北と南』だというご指摘、そしてまとめでは両作品をネガポジ関係に例えられるなど、最後まで興味の尽きないご講演であった。

今回は3名のご発表すべてで、ギaskell以外の作家（それも実際にギaskellと交流のあった人物）の作品が出てきた。改めてギaskellという作家の広範囲にわたる交流の深さを認識した例会であった。松岡光治氏による閉会の辞の後、ホテルグランヴィア岡山内オリビエにて懇親会が行われ、会員同士の親交を深めた。お忙しい中、例会をご準備頂いたすべての先生方にお礼申し上げます。

（大阪工業大学特任講師 瀧川宏樹）

第30回大会レポート

日時：2018年10月6日（土）午後1時より

会場：早稲田大学 早稲田キャンパス 9号館5階

開会の辞：日本ギaskell協会会長 木村 晶子（早稲田大学教授）

シンポジウム：「比較」で読み解くギaskell文学——『協会創立30周年記念論集』を語る

司会・講師 大野 龍浩（熊本大学教授）

講師 江澤 美月（一橋大学非常勤講師）

講師 西垣 佐理（近畿大学准教授）

講師 木村 正子（岐阜県立看護大学専任講師）

講師 松浦 愛子（釧路公立大学准教授）

総会：総合司会 事務局長 木村 正子（岐阜県立看護大学専任講師）

講演：司会 宇田 和子（埼玉大学名誉教授）

“‘Take no sugar in your tea’: Ethical Economics in Gaskell’s Novels’

Dr Lesa Scholl (University of Queensland)

閉会の辞：日本ギaskell協会会長 木村 晶子（早稲田大学教授）



（撮影：大野龍浩）

シンポジウム「比較」で読み解くギaskell文学——『協会創立30周年記念論集』を語る

日本ギaskell協会創立30周年論集『比較で照らすギaskell文学』（大阪教育図書）の魅力の一部を、執筆陣有志5名による研究発表により紹介した。「比較」をキーワードに、ギaskellの作品同士、同時代人、および他作家の作品との比較考察を通して、ギaskell文学の持つ豊穡性と新たな読みの可能性を示した。

（大野龍浩）

「Moralization in Elizabeth Gaskell’s Later Fiction」

ギaskellの初期作品に見られる道徳主義は、創作技量の円熟とともに後期作品では収まると考えられているが、必ずしもそうとは言えない。キリスト教道徳を吐露する人物は後期作品にも登場するし、それを登場人物の言動に自然に盛り込むことで道徳主義を目立たなくする技法は、初期作品にも顕在している。そもそも、道徳主義か否かの判断は、読み手の主観によるところが大きい。この解釈の妥当性を、①具体例を作品から引いて考証したあと、②ギaskellの聖書関連語（“god,” “christ,” “saviour,” “redeemer,” “heaven,” “holy

ghost/spirit,” “bible,” “scripture,” “gospel,” “church”など)の使用頻度を電子テキストを利用して百万語あたりに換算した結果を作品の出版年順に並べたグラフにより客観的に裏付けし、ギaskell文学の真髄は、やはり、作品を信仰告白の手段として用いるところにあるのではないかと問題提起した。(大野龍浩)

「エリザベス・ギaskellとリー・ハント——『メアリ・バートン』批判の背景」

ギaskellの『メアリ・バートン』には、発表当時、トーリ党系雑誌とマンチェスターの織機所有者から批判されたとの指摘がある。本発表では、このことを念頭に、階級間の対立の激化を助長しているという『ブリテッシュ・クォーターリー・レビュー』の批判を、同作品を高く評価したリー・ハントと穀物法(1815)との関連から再考した。はじめに、ハントが自由貿易主義と対立するトーリ党の保護貿易政策である穀物法に対し、中流階級と労働者階級双方の生活を圧迫する同法の撤廃に向けて活動していたことを確認した。次に中流階級中心の反穀物法運動に関与しなかったとされるギaskellが、ハントと同様中流階級と労働者階級の反穀物法運動における共闘を支持していることを、二人の書簡のやりとりから考察した。最後に『メアリ・バートン』に登場する職工ジョーブ・リーが自由貿易主義者であることに注目し、この作品が階級間の対立ではなく、融和に向かっていることを確認した。(江澤美月)

「二人のフィリップ——『シルヴィアの恋人たち』と『大いなる遺産』にみる男性の夢と挫折——」

本発表では、『シルヴィアの恋人たち』(1863)のフィリップの恋と挫折の顛末を、それとほぼ同時代に書かれたディケンズの『大いなる遺産』(1860-61)のピップの例と比較することで、当時のイギリス社会における男性性確立の問題を考察した。両作品とも、男性主人公が愛する女性への利己主義的な憧憬とその挫折を共通して描きつつ、その後の運命が大きく異なったのは、男性性確立に必要な一要素である「男性同士の絆」の有無にある。ピップには義兄や友人らとの絆があったため、挫折から立ち直れたのだが、フィリップにはそうした絆がなかったために、悲劇的結末に終わる。その意味で、この作品は愛する女性だけでなく男性自身をも不幸にする男性的恋愛の破壊的側面が徹底して描かれたとも言えるのである。(西垣佐理)

「Gaskell と Nightingale 姉妹——それぞれのヒロイズムと *North and South*」

本発表では、ギaskellがナイチンゲール姉妹と出会い、二人の思考や行動から推察したヒロイズムと、ギaskell作品に描かれるヒロイズムとの比較を行った。フロレンス・ナイチンゲールは戦場での看護活動を通して、博愛主義的精神に基づく女性の社会活動の場を築き、ギaskellは彼女をモデルとして、『北と南』のマーガレット・ヘイルを設定したという指摘がすでになされている。しかし書簡によると、ギaskellが親密な交流を継続していたのはフロレンスの姉パーセノップであり、またギaskellが、妹の活動を後方支援するパーセノップを高く評価していたにもかかわらず、これらの点は看過されている。そこで本発表は、ギaskell作品が英雄の活動はもとより、英雄を背後で支える無名の存在に注目していることを照射し、『北と南』にはフロレンスとパーセノップ双方の価値、「活動と休止／沈思」という新しいヒロイズムが提示されていると結論づけた。(木村正子)

「ハビトゥスとテイストの狭間——劇作家ディオ・ブーシコーの『ロング・ストライキ』(1866)のイースト・エンドとウエスト・エンドにおける受容の比較」

エリザベス・ギaskellの社会問題小説『メアリ・バートン』は、英国の労働者階級の状況の正確な記述と一般に評価されている。しかし、劇作家ディオ・ブーシコーによる翻案劇 *The Long Strike* の当時の劇評から、必ずしもギaskellに対する上記の評価は正しくないと指摘した。ギaskellは『メアリ・バートン』の序章において、中産階級による労働者階級への共感を求めた。ブーシコーによる翻案劇も同様に、原作の複雑で繊細な感情を表現し、ウエスト・エンドの劇場において劇の内容に共感した観客の涙や笑いを誘発したことが当時の劇評からわかる。しかし、共感するためには、ジェンダーや階級で規定された同一の感情構造の共有が前提となる。劇がイースト・エンドで再演された時、労働者の観客は、感情を組むことができず、思いがけない笑いを誘発した。観客の笑いの原因をハビトゥスに規定された階級の成員の身体記憶と感情の表し方の違いと指摘した。(松浦愛子)

講演： “Take no sugar in your tea”: Ethical Economics in Gaskell’s Novels’

ギaskell作品の多くは、経済が人々の生活に及ぼす影響を描いている。例えば『ルース』『クランフォード』『北と南』において中心人物たちは経済的弱者であるが、社会規範に縛られつつも、自己主張し他者への共感を表わしている。この状況は特に食を共にする場面に描かれている。招かれた席で「砂糖をどれくらいお茶に入れたら良いか」が教えられたり、“elegant economy”を守ろうとしたりといった具合である。世界情勢の変化や法律改正を背景に、多様な人々が、経済的な不安の中で、どのように他者に倫理的に対応したらよいかという難題に答えようとしている。最も楽天的な解決提示は『北と南』における工場労働者と経営者が昼食を共にする場面で、階級を超えた共同が社会と人間関係を維持する展望が描かれている。さらに、ギaskellが19世紀に描いた経済と社会生活の問題は、21世紀における同様の問題を予兆している。

(宇田和子)

「大会に参加して」

日本ギヤスケル協会第30回大会は、早稲田大学早稲田キャンパス（9号館5階）において開催された。今回のシンポジウムは「比較で読み解くギヤスケル文学」と題したもので、協会創立30周年記念論集の出版に先駆けて行われた。パネリストは大野龍浩先生、江澤美月先生、西垣佐理先生、木村正子先生、松浦愛子先生の5名でギヤスケルの道徳観や政治的立場に関する考察、ディケンズ作品との比較、ナイチンゲール姉妹との関わり、演劇との比較など多岐に渡る発表だった。記念論集の完成がさらに待ち遠しくなるものだった。

Les Scholl 先生による講演 “‘Take no sugar in your tea’: Ethical Economics in Gaskell’s Novels” では、砂糖に関する記述から登場人物間の階級差や彼らに対する経済的な影響を考察するものであり、ギヤスケル作品を社会的な枠組みから読み直す良いきっかけを得られた。

大会後は早稲田大学内の楠亭で懇親会が催された。Les Scholl 先生を囲んだ記念撮影に続き、美味しい料理とワインを片手に参加者との温かい交流が深まる場となった。

（福岡大学外国語講師 濱奈々恵）

日本ギヤスケル協会役員会報告

1. 役員会報告

1) 2018年度第一回役員会（6月2日（土）11時～13時、岡山国際交流センター4F 交流サロン）

①経費節減について

Webの活用を促進する。HPやMLで情報の配信を行い、「ニューズレター」の印刷費と郵送費の節減に努める。例会・大会の出欠確認には「伝助」を利用する。

②「ニューズレター」について

2018年度の「ニューズレター」は紙媒体とPDF版を発行し、PDF版をML登録者に配信した。2019年度よりPDF版のみの発行とする。

③例会・大会の開催について

2020年度より、例会と大会を年1回の全国大会に集約する。

④『ギヤスケル論集』第28号について

本号より、論集には編集規定と投稿規定を掲載し、会則及び倫理規定をWeb上に掲載する。

2) 2018年度第二回役員会（10月6日（土）11時～12時、早稲田大学9号館5階第二会議室）

①会員資格について

2019年度より2年間連続会費未納で会員資格喪失となることが承認された。

②協会会計について

・英国協会会費について

英国協会会費を2019年度より値上げすることが承認された。送金手数料（ゆうちょ銀行より口座間振替にて送金）値上げに伴う処置。

・研究会補助金について

多比羅眞理子氏より研究会補助金減額の申し出があり、承認された。

・懇親会費について

2018年度より懇親会費を別会計とし、協会予算（一般会計）に組み入れないことが承認された。

③協会創立30周年記念事業について

2018年大会（早稲田大学にて開催）を「協会創立30周年記念大会」とし、Dr. Les Scholl を講師として招聘する。本講演は早稲田大学の公開講座として補助金を申請するとともに、講演を一般に開放する。補助金は講師謝礼に充当し、協会は講師の日本国内旅費を規定に従って支出する。また本件については、宇田和子氏（大会運営委員）から講師招聘に伴う渡航費の寄付（私費による授受のため協会予算には組み入れない）をいただいた。

④次年度の活動予定

2019年度例会は6月1日（土）関西学院大学梅田キャンパスにて開催予定。研究発表は谷綾子氏と濱奈々恵氏、講演は足立万寿子氏。

大会は10月5日（土）実践女子大学渋谷キャンパスにて開催予定。シンポジウムの責任者は石塚裕子氏、講演は鈴木美津子氏。

⑤『ギヤスケル論集』について

論集の投稿規定を改定し、第29号（2019年度）より適用する。

・MLAの第7版以上に準ずること

・英文原稿（アブストラクトを含む）はネイティブ・チェックを受けること

執筆者には規定遵守を促す。

⑥次期会長選出について

現行では現役員会から選挙により会長を選出することになっているが、次期会長は三役で候補を選出し、役員会に諮る方法に変更することが承認された。

2.総会報告

①事務局報告

2017年度決算報告および2018年度予算案が承認された。

2019年度より英国協会会費値上げが承認された。

②『ギヤスケル論集』投稿規定の改定が承認された。

③協会創立30周年記念事業についての報告

- ・『創立30周年記念論集 比較で照らすギヤスケル文学』（大阪教育図書）の刊行
- ・30周年記念講演に Dr. Lesa Scholl を講師として招聘

(木村 正子)

◆◆◆◆◆日本ギヤスケル協会 第31回例会の御案内◆◆◆◆◆

日時：2019年6月1日（土）午後2時から 会場：関西学院大学梅田キャンパス

研究発表

「Cranford における性の受容」

発表者：谷 綾子（龍谷大学講師）

「成功の場、墮落の場、救済の場——George Eliot 作品との比較でみる「外の世界」」

発表者：濱 奈々恵（福岡大学外国語講師）

講演

「Cousin Phillis 再考——「祈り」に着目して」

講演者：足立 万寿子（元ノートルダム清心女子大学教授）

◆◆◆日本ギヤスケル協会 第30回大会 予告◆◆◆

日時：平成30年10月5日（土）午後1時から 会場：実践女子大学渋谷キャンパス

シンポジウム：「イギリス小説における黒人の表象あるいは不在」

司会・パネリスト：石塚 裕子（神戸大学名誉教授／盛岡大学教授）

「19世紀小説における黒人の不在——ギヤスケル、ディケンズ、サッカー」

パネリスト：武田 将明（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

「“A Negro had a soul?”: 18世紀イギリス文学における黒人表象」

パネリスト：新井 潤美（東京大学教授）

「“Rather a Friend to the Abolition”——ジェイン・オースティンの作品における「黒人」への言及」

パネリスト：松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）

「ハリエット・マーティノーからジョージ・エリオットへ——反奴隷制から人種問題へ」

講演

「拒絶する女たち——マライア・フルアート、エリザベス・ベネット、そしてマーガレット・ヘイル」

講演者：鈴木 美津子（東北大学名誉教授）

★ 次年度研究発表を募集しております。お申し込みは12月末日までに事務局へメールにてお願い申し上げます。

◆◆◆研究会予定◆◆◆

ギヤスケルの中編・短編小説の読後感を自由に語り合い鑑賞する研究会です。今年度は以下の作品を取り上げる予定です。

作品：2019年 3月 “Night Fancies” (1966)
 “On Visiting the Grave of My Stillborn Little Girl” (1906)
 5月 “Sketches among the Poor-No.1” (1837)
 7月 “Shams” (1863)
 9月 *The Life of Charlotte Brontë* (1857) 第1巻
 11月 *The Life of Charlotte Brontë* (1857) 第2巻
2020年 1月 “Disappearances” (1851)
 3月 “Company Manners” (1854)

日時：奇数月 第2日曜日 午後2時～午後4時

会場：実践女子学園桜会館（東京都渋谷区東1-1-40 [TEL:03-3407-7459](tel:03-3407-7459)）

※ 日時、会場の変更がある場合は、日本ギヤスケル協会 HP に掲載いたしますので、新着情報をお確かめ

下さい。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

(長浜麻里子)

..... 編集後記

今回からNLはwebでの公開のみとなりました。今号の巻頭は、2019年1月31日にご逝去された日本ギヤスケル協会の創設者・初代会長の山脇百合子先生への現会長による追悼文です。山脇先生に謹んで哀悼の意を表します。

例会は今年度が最後の開催となります。大会とともに、皆様ぜひご参加ください。最後になりましたが、鈴江璋子先生をはじめ、ご執筆くださった先生方に厚く御礼申し上げます。また、NL発行までの作業に惜しみなくお力添えくださった木村晶子会長、松岡光治副会長、木村正子事務局長、遠藤花子幹事に深謝いたします。

(編集：志渡岡 理恵)

発行： 日本ギヤスケル協会
〒501-6295
岐阜県羽島市江吉良町 3047-1
岐阜県立看護大学 機能看護学領域
木村正子研究室
URL: <http://www.gaskell.jp/>
e-mail: mkimura@gifu-cn.ac.jp

発行日： 2019年5月1日